様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：２３６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２１９８

研究課題名（和文）ヘルマン・コーヘンを中心としたユダヤ系哲学者における宗教と倫理

研究課題名（英文）Religion and Ethics in Hermann Cohen and other jewish philosophers

研究代表者
馬場　智一（Baba, Tomokazu）

長野県立大学・グローバルマネジメント学部・教授

研究者番号：１０７１３３５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：補助事業期間は当初3年計画であったが、コロナウィルスのため、フランス渡航を3年延期した。結果として研究期間は6年になった。コーヘンの「子供たち」に関しては、レヴィナスをはじめとするパリユダヤ学派とシュトラウスを中心に、思想史的な成果を上げることができた。コーヘン宗教哲学の現代性については、尊厳概念および哲学対話における諸問題との関わりで哲学的な研究成果を上げられた。雑誌論文4件、学会発表8件、図書7件の成果を挙げた。最終年度の研究結果についても今後も学会発表や論文などで公表する予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ヘルマン・コーヘンの哲学、とりわけ宗教哲学は少数の研究を除き正当な学術的関心を受けてこなかった。本研究は、その後継者を現在より広い関心を集める哲学者たちのなかに見出し、コーヘンが哲学史上本来担うべき意義に新たな光を照らした。本研究では、こうしたコーヘンの哲学の現代的意義を問うべく、尊厳概念や哲学対話における諸問題をコーヘン哲学の観点から分析した。格差、分断が深まる現代において、人権の基礎となる尊厳概念や、分断を乗り越える鍵になる対話実践の再検討に資する成果が得られた。

研究成果の概要（英文）：The grant project period was originally planned for three years, but due to the coronavirus, the trip to France was postponed for three years. As a result, the research period became six years. Regarding Cohen's "children," I have achieved results in the history of ideas, focusing on Strauss and the Paris Jewish School, including Levinas. Regarding the actuality of Cohen's philosophy of religion, I have produced philosophical research results in relation to the various issues in the concept of dignity and the philosophical dialogue. I produced 4 journal papers, 8 conference presentations, and 7 book chapters. I plan to continue to publish the results of our research in the final year in the form of conference presentations and articles.

研究分野：哲学

キーワード：宗教哲学　共同性　個人　尊厳　対話

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

国内の近年の研究では、同化問題、スピノザ問題、認識論を除くと、松井富美男氏の「ヘルマン・コーヘンの理想論」(2016)が、コーヘンの宗教哲学の倫理学的意義を強調している。国外に目を向けると、コーヘンの宗教哲学についてのモノグラフは、AndreaPoma,YearningForFormAnd Other Essays On Hermann Cohen's Thought(Springer, 2004), Sophie Nordmann, Du singulier à l’universel (J. Vrin, 2007)、さらにはローゼンツヴァイクとの関連に焦点を当てたものでは あるが Myriam Bienenstock, Cohen Face à Rosenzweig (J. Vrin, 2008)がある。Poma は最終章 でポストモダンにおけるコーヘン哲学の意義について語り、Nordmann や Bienenstock は最終章で レヴィナスに言及している。また、Bienenstock 編集による Revue de métaphysique et de moral のコーヘン特集号(2011 年 1 月)の冒頭でもレヴィナスとの比較研究が課題として挙げられている。いずれも、今日コーヘンを読む意義について論じた貴重な先行研究である。

２．研究の目的

コーヘンの宗教哲学が、多元主義的を基調とするグローバル化した世界において、また宗教共同体間の対立が強まる今日において、どのような意義を持ちうるのか、まだ議論は不充分である。本研究計画は、コーヘンの宗教哲学そのものの特徴を、他のユダヤ系哲学者と比較しながら、宗教と倫理を巡る現代的議論にいかなる貢献がしうるのかを明らかにしようとするものである。

３．研究の方法

① コーヘンの哲学体系における宗教と倫理の関係、さらにその宗教哲学的内実である『ユダヤ教を源泉とした理性の宗教』(以下『理性の宗教』)の主張内容を明らかにする。
② その響咳に直接触れたかどうかに係らず、また影響を認めているかどうかに係ら ず、コーヘンと哲学的に関連性が深い次の四人の哲学者を「コーヘンの子供たち」として扱う。 すなわち、ブランシュヴィク、ローゼンツヴァイク、シュトラウス、レヴィナスである。
③ コーヘンとスピノザの関係を再検討し、その相違と(場合によってはその隠れた)接点を明らかにする。
④ 一つの社会における宗教に関連する価値観の対立に関する言説、あるいは英語圏における共同体 論者(テイラー、サンデル)において、(宗教)共同体とその成員がどのような関係として想定されているのか、様々な立場の分析とマッピングを行った上で、宗教を「本質的に人間を個人として扱う」ものとするコーヘンの宗教哲学がもちうる意義、特に現代の徳倫理学の観点からコーヘンの徳論がどのような意味を持ちうるかを検討する。

４．研究成果

2017 年
本年度は研究実施計画のうち初年度であり、『哲学的体系における宗教概念』と『ユダヤ教を源泉とする理性の宗教』の読解に充て、その成果を下半期にまとめ、海外での研究打ち合わせを行う予定であった。２年目はコーヘンと「その子供たち」との比較研究、３年目はコーヘンとスピノザ問題を扱う予定である。
１年目は『哲学的体系における宗教概念』の読解に予想より時間がかかり、『ユダヤ教を源泉とする理性の宗教』には十分に読解作業を割けなかった。その代り、２年目の作業である「その子供たち」（陰に陽にコーヘンの影響下にある「ユダヤ系」哲学者たち）との比較作業の準備作業として、当初予定していなかった「ユダヤ系」哲学者シモーヌ・ヴェイユの『根をもつこと』を読解し、特にそこで論じられる欲求としての責任概念について、レヴィナスやハイデガーとの比較作業を行った。
『哲学的体系における宗教概念』では、哲学体系において宗教が占める意義が、倫理学、論理学、美学、心理学のそれぞれにおいて述べられている。論理としては、あらゆる判断の前提としてすでになされている（要請される）無限判断の論理が貫徹されているように思われる。
シモーヌ・ヴェイユはユダヤ系の出自をもちながらもユダヤ的伝統には傾倒することなく、むしろキリスト教神秘主義思想やギリシア思想に関心を深めた。そうした宗教的思考は『根を持つこと』における一種の人間実存論および社会哲学と決して無関係ではない。超越への志向とそれを要請する人間存在と（ありうべき）社会の関係は、コーヘンの宗教論とパラレルな面も見られる。
ヴェイユに関する発表をイギリスとブルガリアで、コーヘンとマイモニデスに関する発表を東

京で行った。年度の最後に渡仏しコーヘン研究者のノールマン氏と研究打ち合わせを実施した。

2018 年
今年度は、レヴィナス、ローゼンツヴァイク、シュトラウス、ブランシュヴィクといった思想的にコーヘンと近い思想家たち（「コーヘンの子供たち」）との比較研究に充てられた。
レヴィナスについては、テクストレベルではコーヘンに対しては否定的な言及しかないことが知られていたが、ジャン・アルペランの証言（Cohen, Cerf,2014)からレヴィナスがコーヘンを「巨人」と評していたことが分かった。また世界イスラエル同盟図書館での調査から、フリブール大学での客員教授としてのゼミのタイトルが、「ヘルマン・コーヘンのテクストの解説、ユダヤ教論集：理性の宗教」であったことが判明した。
ブランシュヴィクについては、『数学的哲学の諸段階』での、コーヘンへの直接の言及が知られていたが、内容的にさほど重要ではなく、むしろカッシーラーへの言及がはるかに多いことが分かった。コーヘンとの直接的影響関係ではなく、思想やテーマ、あるいはスピノザ受容の比較などの観点からアプローチすべきであることが改めて明確になった。
シュトラウスについては、1930 年代に行った講演「コーヘンとマイモニデス」からその後どのようにシュトラウス独自の思想を歩むようになったのかを理解することに注力した。シュトラウスは、マイモニデスをプラトン主義者として理解したコーヘンを評価しつつも、中世イスラーム・ユダヤ思想の研究から、「哲学の社会学」の必要性を 1940 年代に主張してゆくようになる。コーヘンの宗教哲学のアクチュアリティを探る、本研究最終年度の課題を見据ると、シュトラウス的な観点からコーヘン哲学の社会学を行うことも興味深い作業となることが見えてきた。

2019 年
研究実施計画では、今年度は、コーヘンとスピノザを主題として、コーヘンのスピノザ読解と、「コーヘンの子供たち」のスピノザ論との比較研究および、現代共同体論や徳倫理学の観点からの『理性の宗教』の検討を行う予定であった。前年度の作業がやや遅れていたことの影響を受け、今年度も引き続き、前年度の作業「コーヘンの子供たち」との比較作業を継続した。「子供たち」のうちでは、特に、シュトラウス思想における哲学の秘教性について、その背景の一つとなるマイモニデス『迷えるものへの導き』における哲学の秘教性にまで遡って研究した。シュトラウスが論じる秘教性とは異なり、マイモニデスにおいては、哲学の学習は、学習の準備ができていない者に対して閉じられたものであり、その秘教性は、相対的なものに留まる。ここで哲学と呼ばれるものは、狭い意味ではアリストテレス形而上学であり、それはユダヤ思想の歴史におけるマアセメルカバを理解するためのものである。マアセメルカバは、ユダヤ思想における無限概念の重要なトポスである。
マイモニデスを論じるコーヘンがこの点をどのように理解しているのか、さしあたり研究は見当たらないのであるが、無限判断を基盤としたコーヘンの思想を扱う本研究にとって、重要な論点であることを発見した。また、この点は、本来本年度行う予定であった、スピノザ読解においても、哲学の秘教性とともに、考慮に入れるべき論点であると思われる。

2020 年
新型コロナウィルス蔓延のため昨年度に引き続き、計画していた渡仏は延期した。その代わり、研究打ち合わせを予定していたソフィー・ノールマン氏（EPHE）のゼミにオンラインで出席し、コーヘン宗教哲学などを下敷きにした、氏の著作、『超越の現象学 II 世界』の内在的な理解に努めた。
研究計画最終年度は、コーヘンの宗教哲学が持つ現代倫理学的な意義について考察する予定であった。Nordmann 氏の著作は、そのような考察の一例である。人間の人間性をめぐる現代の議論では、人間と他の動物との境界線が揺らぎ、人間の尊厳そのものが相対化される動向が見られる。氏が想定しているのはフランスにおける議論であるが、同様の議論はシンガーの功利主義的な動物権利論にも当てはまる。ノールマン氏は、カントの尊厳概念を、コーヘン、ローゼンツヴァイク、レヴィナスといったユダヤ系哲学者の提示した超越をめぐる議論を基礎にして、改めて再定義する。氏によれば、人間の〈人間性〉は、理性といった人間が所有していると想定される属性からなるのではなく、思考による世界の超越という、世界との関係の独自性に存している。彼女の議論には、人間の人間性を属性に還元することで人間性がむしろ溶解しつつある現状に対して一石を投じる目論見があるが、これはコーヘンの宗教哲学を基礎の一つとして展開されている。人間の尊厳をめぐる、あるいはカントの尊厳概念をめぐる現代の議論状況の中に彼女の批判を位置付ける作業が今後必要となると思われる。

2021 年
研究計画のうち、「コーヘン宗教哲学の形成とその内実」については、『純粋認識の論理学』における無限判断概念についての調査を行った。学的認識を構成する三つの判断（根源判断、同一性判断、矛盾判断）のうち、根源判断の性質を説明するものとして、無限判断は位置付けられている。これまでの先行研究でコーヘンに帰されていた無限判断概念とは、若干異なっていることが明らかになった。このことは、コーヘン哲学全体の評価や、体系のなかにおける無限判断の役割を評価する際に基礎となる視点である。この基礎的な視点を獲得できたことは本研究課題にと

っては意義のある成果となった。
また、「『ユダヤ教を源泉とする理性の宗教』の現代的意義」については、コーヘン哲学の現代的展開の一例として、ソフィー・ノールマン（1975～）の超越の現象学についての調査を行った。ノールマンは、人間の尊厳をめぐる現代的議論に、「人間存在のアンチノミー」が見られるとし、そこからの脱出の方途として、これまで宗教との関わりで理解されてきた「超越」概念を、超越概念の理解を現象学的に記述することで、超越概念の脱神学化、宗教化を図った。この問題を扱ったのが『超越の現象学』ⅠとⅡである。その際、世界とその外部についての発想が重要となるが、そこに、コーヘン、ローゼンツヴァイク、レヴィナスの
議論が援用されていることを、ノールマンの『超越の現象学』以前のユダヤ教と哲学の関係に関する研究との連続性明らかにした。

2022 年
新型コロナウィルスのため、最終年度の渡仏を延期してきたが、23 年 2 月に渡仏し研究を終了した。フランス国立図書館で関連文献をまとめて参照することで、幾つかの成果が得られた。コーヘン宗教哲学の形成とその内実については、無限判断の論理と宗教哲学の関連について先行研究調査により、課題を整理した。本研究では Gordin の所論に従い、無限判断が宗教哲学の体系にも貫徹したものであるとの仮説から出発した。最終年度の研究で、特に個人概念の形成に、無限判断が活かされていることが明確になった。個人の成立に他者が条件として要請されるコーヘンの個人概念は、現在日本の教育現場などで行われている哲学対話の実践においても重要な視座である。こうした個人概念を基盤とした、コーヘンの隣人愛や共同体概念は、真理探究のコミュニティの成立にとっても極めて大きな意味をもつ。哲学対話の実践は、熟議民主主義やシチズンシップ教育の有力な手段ともなるが、コーヘンのこれらの概念はそうした現代的課題にとっても示唆的である。コーヘンの「子供たち」に関する研究は、当初予定していたブランシュヴィク、ローゼンツヴァイク、シュトラウスよりは、レヴィナスおよび関連するユダヤ教パリ学派（ゴルディーン、アスケナズィ）に焦点を変更した。彼らにおける歴史哲学、とりわけ Historiosophie に関する議論（世代産出 Engendrement）が、大きな物語終焉以後の歴史哲学の一つの形態として、現代倫理学における世代間倫理の議論や、反出生主義の議論において、示唆的であることが分かった。
パリ学派について研究するさらに若い世代のノールマンが、ユダヤ哲学をベースにして展開した尊厳論についても、その論理を明らかにすることができた。

最終報告
補助事業期間は当初 3 年計画であったが、コロナウィルスのため、フランス渡航を 3 年延期した。結果として研究期間は 6 年になった。コーヘンの「子供たち」に関しては、レヴィナスをはじめとするパリユダヤ学派とシュトラウスを中心に、思想史的な成果を上げることができた。コーヘン宗教哲学の現代性については、尊厳概念および哲学対話における諸問題との関わりで哲学的な研究成果を上げられた。雑誌論文 6 件、学会発表 13 件、図書 9 件の成果を挙げた。最終年度の研究結果についても今後も学会発表や論文などで公表する予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ヘルマン・コーヘンの哲学、とりわけ宗教哲学は少数の研究を除き正当な学術的関心を受けてこなかった。本研究は、その後継者を現在より広い関心を集める哲学者たちのなかに見出し、コーヘンが哲学史上本来担うべき意義に新たな光を照らした。本研究では、こうしたコーヘンの哲学の現代的意義を問うべく、尊厳概念や哲学対話における諸問題をコーヘン哲学の観点から分析した。格差、分断が深まる現代において、人権の基礎となる尊厳概念や、分断を乗り越える鍵になる対話実践の再検討に資する成果が得られた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 馬場智一	４．巻 1
２．論文標題 バルバラ・カッサン『ノスタルジー』におけるハイデガー的「存在のノスタルジー」の解体	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Supplement	６．最初と最後の頁 160-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 馬場智一	４．巻 4
２．論文標題 哲学対話における「問い」の難しさについて	５．発行年 2022年
３．雑誌名 対話と思考	６．最初と最後の頁 12-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 馬場智一	４．巻 11（2）
２．論文標題 コーエンのマイモニデス読解とその余波――ゴルディーン、レヴィナス、シュトラウス	５．発行年 2020年
３．雑誌名 京都ユダヤ思想研究	６．最初と最後の頁 98-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Tomokazu Baba	４．巻 2
２．論文標題 Philosophy as Journey	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Global Conversations: An International Journal of Philosophy and Contemporary Culture	６．最初と最後の頁 9-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Tomokazu Baba	4．巻 1
2．論文標題 Elemental Evil Levinas Re-reading Hegel	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Global Conversations: An International Journal of Philosophy and Contemporary Culture	6．最初と最後の頁 39-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 馬場智一	4．巻 73
2．論文標題 世界観としての哲学とナチズム－ハイデガー、ライナー、レヴィナス	5．発行年 2018年
3．雑誌名 長野県短期大学紀要	6．最初と最後の頁 55-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　5件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 馬場智一
2．発表標題 故郷喪失訴訟から考える〈ふるさと〉
3．学会等名 哲学論集研究会（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 馬場智一
2．発表標題 対話と教育－レヴィナスから考える
3．学会等名 レヴィナス協会（招待講演）
4．発表年 2022年

１．発表者名 Tomokazu Baba
２．発表標題 Individualities in Dialogue
３．学会等名 ICPIC Tokyo（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 馬場智一
２．発表標題 コミュニティのための対話
３．学会等名 UTCP（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 馬場智一
２．発表標題 哲学対話における問いとは何か
３．学会等名 哲学プラクティス学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 馬場智一
２．発表標題 コーヘンの無限判断論とその射程－序説
３．学会等名 ドイツ認識論集研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 馬場智一
２．発表標題 バーバラ・カッサン『ノスタルジー』をめぐって
３．学会等名 脱構築研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 馬場智一
２．発表標題 哲学の秘教性再考
３．学会等名 日本哲学会第78回大会公募ワークショップ①「政治哲学の公共性と秘教性：スピノザ主義的啓蒙とその周辺」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tomokazu Baba
２．発表標題 Philosophy as Journey
３．学会等名 International Colloquium in Contemporary Philosophy and Culture（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tomokazu Baba
２．発表標題 Levinas en tant que directeur de l’ENIO et la tradition
３．学会等名 Colloque international Le singulier et l’universel Levinas et la pensee de l’extreme orient（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tomokazu Baba
２．発表標題 Place and Uprootedness. Heidegger, Levinas, Weil
３．学会等名 Narratives of Displacement. International Conference “Places of (Non-)Belonging. Post-colonialism, Nomadism and Alterity”（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 馬場智一
２．発表標題 コーヘンとマイモニデス
３．学会等名 京都ユダヤ思想学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Tomokazu Baba
２．発表標題 Place and responsibility: Weil, Levinas, Heidegger
３．学会等名 International Colloquium in Contemporary Philosophy and Culture “Converging Differences: Global Thinking and Local Existence"（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計9件

１．著者名 レヴィナス協会、渡名喜 庸哲、藤岡 俊博、石井 雅巳、犬飼 智仁、小手川 正二郎、佐藤 香織、長坂 真澄、服部 敬弘、馬場 智一、平石 晃樹、平岡 紘、村上 暁子	４．発行年 2022年
２．出版社 法政大学出版局	５．総ページ数 352
３．書名 レヴィナス読本	

１．著者名 横地徳広	４．発行年 2023年
２．出版社 弘前大学出版会	５．総ページ数 477
３．書名 見ることに言葉はいるのか	

１．著者名 加藤 泰史、後藤 玲子	４．発行年 2022年
２．出版社 法政大学出版局	５．総ページ数 494
３．書名 尊厳と生存	

１．著者名 杉村 靖彦、渡名喜 庸哲、長坂 真澄	４．発行年 2022年
２．出版社 法政大学出版局	５．総ページ数 422
３．書名 個と普遍	

１．著者名 バーバラ・カッサン著、馬場智一訳	４．発行年 2020年
２．出版社 花伝社	５．総ページ数 200
３．書名 ノスタルジー　我が家にいるとはどういうことか	

1．著者名 Alberto Centeno-Pulido (ed.)	4．発行年 2018年
2．出版社 Interdisciplinary Discourses	5．総ページ数 246
3．書名 Places of (Non-)Belonging: Post-colonialism, Nomadism, and Alterity	

1．著者名 ギュンター・ペルトナー	4．発行年 2017年
2．出版社 晃洋書房	5．総ページ数 370
3．書名 哲学としての美学　〈美しい〉とはどういうことか	

1．著者名 ヘイドン・ホワイト	4．発行年 2017年
2．出版社 作品社	5．総ページ数 703
3．書名 メタヒストリー	

1．著者名 シモーヌ・ヴェイユ他	4．発行年 2017年
2．出版社 水声社	5．総ページ数 293
3．書名 シモーヌ・ヴェイユ（別冊水声通信）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Global Conversations vol.2 http://philogc.org/vol-2/ /tomokazubaba.jp http://tomokazubaba.jp/ Society for Philosophy as Global Conversation http://philogc.org/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 Narratives of Displacement. International Conference “Places of (Non-)Belonging. Post-colonialism, Nomadism and Alterity”,	開催年 2017年～2017年
国際研究集会 International Colloquium in Contemporary Philosophy and Culture “Converging Differences: Global Thinking and Local Existence”	開催年 2018年～2018年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関